木村　博教授　略歴

学　歴

昭和54年３月　　中央大学文学部哲学科　卒業
昭和58年３月　　法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程　修了
昭和62年３月　　法政大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士後期課程　単位取得満期退学

甲南学園における主な経歴

平成26年９月１日～現在　　甲南大学 教授

主な役職等

なし

主な委員・会議等

伊藤忠兵衛基金出版助成委員会
合同教授会
キャリアセンター委員会

賞　罰

なし

木村　博教授　業績一覧

著　書

1．『ヘーゲル事典』（共著）――加藤尚武他編――弘文堂，1992年２月刊行
　・執筆項目
　「ヴィンテール　Winterl, J. J.」　30頁
　「ヴェルナー　Werner, A. G.」　30～31頁
　「オーケン　Oken, L.」　48頁
　「ガル　Gall, F. J.」　73頁
　「シュテッフェンス　Steffens, H.」　228頁
　「神経組織　Nervensystem」　249頁
　「親和性　Affinitaet, Verwandtschaft」　263～264頁

2．『「ドイツ・イデオロギー」の射程』（共著）
　――岩佐茂・小林一穂・渡辺憲正編――創風社，1992年９月刊行
　第Ⅲ章「宗教批判と自己意識――ブルーノ・バウアー，フォイエルバッハとマルクス――」　71～114頁

3．『ドイツ観念論と自然哲学』（共著）
　――伊坂青司・長島隆・松山寿一編――創風社，1994年３月刊行
　第一部第Ⅲ章「フィヒテ自然哲学の基底――構想力の揺動――」　67～89頁

4．『地球環境と教育――未来をひらく緑のビジョン――』（共著）
　――西村俊一，木俣美樹男編――，創友社，1996年１月刊行
　第一部第三章「江渡狄嶺と柳宗悦における『美』の問題」　134～151頁

5．『都市と思想家』（共著）
　――石塚正英他編――法政大学出版局，1996年７月刊行
　下巻第Ⅱ部第一章「イエナとフィヒテ」　76～93頁

6．『カント事典』（共著）――石川文康他編――弘文堂，1997年12月刊行
　・執筆項目
　「反省　Reflexion, Ueberlegung」　419頁
　「包摂　Subsumtion」　479頁

7．『文化論のアリーナ』（編著）
　――文化論研究会（木村博ほか）編――晃洋書房，2000年５月刊行
　第五章「文化の水脈としてのことばと身体」　145～185頁

8．『新マルクス学事典』（共著）――柴田隆行他編――弘文堂，2000年６月刊行
　・執筆項目
　「イエナ　Jena」　17頁
　「フィヒテ　Fichte, J. G.」　409～410頁

9．『現代に生きる江渡狄嶺の思想』（編著）
　――斎藤知正・中島常雄・木村博編――農文協
　2001年12月刊行
　「各論の課題と構成」　19～23頁
　第Ⅱ部　第二章「場と場所――江渡狄嶺と西田幾多郎――」　181～217頁

10．『人間環境学への招待』（編著）
　――長崎総合科学大学人間環境学部（木村博ほか）編――丸善

2002年 9 月刊行
「環境を創造する新しい学問としての人間環境学」 iii～viii頁
「環境は自然とどのように違うのか」 2～7頁
「ストックホルム宣言（人間環境宣言）と責任倫理」 8～13頁
「環境問題と明日の責任」 176～181頁

11.『フォイエルバッハ――自然・他者・歴史――』（共著）
――フォイエルバッハの会編――理想社，2004年 3 月刊行
第三章「他者論をめぐるフィヒテとフォイエルバッハ」 129～145頁

12.『環境倫理の新展開』（共著）
――山内廣隆ほか――ナカニシヤ出版，2007年11月刊行
第11章「ジープの具体倫理学」 134～145頁
第12章「より狭義の具体倫理学としての自然倫理学」 146～157頁

13.『環境問題と環境思想』（共著）
――岩佐茂編――創風社，2008年 4 月刊行
第 6 章「景観倫理と景観責任――長崎・被爆遺構から考える――」 169～195頁

14.『フィヒテ――「全知識学の基礎」と政治的なもの――』（編著）
――木村博編――創風社，2010年 8 月刊行
はしがき――本書の構成と課題 3～9頁
第 1 章「第一根本命題と立言判断」 21～49頁
座談会「フィヒテのアクチュアリティ」（入江幸男，岡田勝明，木村博） 267～300頁
インタヴュー　「ホフマン教授に，フィヒテにおける自然および言語の問題を問う」 301～319頁
コラム　「フィヒテと江渡狄嶺――像と場――」 262～264頁
あとがき 359～360頁

15.『フィヒテ論集』（共著）――長澤邦彦，入江幸男編――晃洋書房，
2014年12月刊行
第 III 部　第 6 章「言語論――存在の像としての言語――」 258～270頁

16. “Johann Gottlieb Fichtes Wissenschaftslehre von 1812 Vsrmächtnis und Herausforderung des transzendentalen Idealismus” Hrsg. von Thomas Sören Hoffmann, Duncker & Humblot, Berlin 2016
“Die Wissenschaftslehre von 1812 und das Sehen” S. 109～120

研究論文（52番を除いて，以下はすべて単著）

1．「ヘーゲルの判断論に関する一考察」 25～36頁
『哲学の探求』――第10回全国若手哲学研究者ゼミナール報告・論文集――第10号，1982年11月

2．「イエナ初期ヘーゲルにおける推論について――分裂という課題をめぐって――」『法政大学大学院紀要』第13号，1984年10月 11～19頁

3．「『イエナ体系草稿 I，III』における Mitte の意義について――精神の自己関係態の概念把握のために――」 57～69頁
『法政大学大学院紀要』第14号，1985年 3 月

4．「ヘーゲルの判断論に関する一考察――概念の回復をめぐって――」 17～51頁
『哲学年誌』－法政大学大学院哲学専攻－第16号，1985年 3 月

5．「『自然法論文』における二元論の問題について――ヘーゲル人倫論へのアプローチのために――」 1～10頁

『法政大学大学院紀要』第16号，1986年３月

６．「ヘーゲルの『懐疑主義』について」　18〜26頁
『哲学の探求』――第15回全国若手哲学研究者ゼミナール報告・論文集――第15号，1987年11月

７．「1804/05年の『イエナ論理学』における „Erkennen“ の意義について」　59〜66頁
『法政大学大学院紀要』第20号，1988年３月

８．「イエナ期ヘーゲルにおける『懐疑主義』について」　93〜105頁
『倫理学年報』――日本倫理学会編――第37集，慶應通信，1988年３月

９．「日本文化の宇宙論的位相」　112〜126頁
『哲学の探求』――第16回全国若手哲学研究者ゼミナール報告・論文集――第16号，1988年11月

10.「江渡狄嶺における＜場＞について」　5〜8頁
『狄嶺会だより』――狄嶺会編――No. 61，1989年５月

11.「フィヒテの言語論――その社会思想史上の位置価――」　68〜82頁
『哲学の探求』――第17回全国若手哲学研究者ゼミナール報告・論文集――第17号，1989年11月

12.「フィヒテとシェリングにおける自然構想について」　42〜46頁
『自然哲学研究』――自然哲学研究会編――第２号，1990年６月

13.「イエナ期フィヒテにおける言語と共同性」　130〜142頁
『社会思想史研究』――社会思想史学会編――第14号，北樹出版，1990年10月

14. ‘Zum Skeptizismus beim Jenaer Hegel’［Zusammenfassung］　S. 275〜276
In: Hegel-Studien Bd.25, hrsg. von F. Nicolin und O. Poegeler, Bonn 1990.

15.「若きヘーゲルにおける歴史と懐疑主義」　78〜83頁
『社会思想史研究』――社会思想史学会編――第15号，北樹出版，1991年７月

16.「江渡狄嶺における行と場」　113〜144頁
『白壁』――白壁会編――第７号，文化総合出版，1992年２月

17.「行と行為――江渡狄嶺とフィヒテ――」　23〜29頁
（比較思想学会第５回研究奨励賞受賞［1993年10月９日，於　大正大学］）
『比較思想研究』――比較思想学会編――第18号，東京書籍，1992年２月

18.「フィヒテとラインホルト――言語論をめぐって――」　73〜86頁
『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――創刊号，晃洋書房，1993年11月

19. ‘Problem des Ursprungs der Sprache beim Jenaer Fichte’　33〜49頁
『法政大学教養部紀要　人文科学編』第90号，1994年２月

20.「フィヒテの相互人格性論」　22〜49頁
『国際教育研究』――東京学芸大学海外子女教育センター編――第15号，雄文社，1995年３月

21.「イエナ期フィヒテにおける相互人格性と言語」　123〜132頁
（日本フィヒテ協会第４回研究奨励賞受賞対象論文［1998年11月21日，於　上智大学］）
『理想』第655号，理想社，1995年５月

22.「単校教育理念と相互人格性――江渡狄嶺とフィヒテ――」　229〜240頁
『江渡狄嶺研究』――狄嶺会編――第28号［教育特集号］1995年12月

23.「比喩と構想力――イエナ期フィヒテ言語論の基底――」　55〜65頁
『法政大学教養部紀要　人文科学編』第96号，1996年２月

24.「バイオエシックスと身心問題」　1〜13頁

『国際教育研究』――東京学芸大学海外子女教育センター編――第16号，雄文社，1996年3月

25.「狄嶺とフィヒテ」 14～15頁
『狄嶺会だより』――狄嶺会編――No. 70，1996年12月

26.「動物磁気療法に向けられたフィヒテのまなざし――自然と絶対者――」 22～33頁
『国際教育研究』――東京学芸大学海外子女教育センター編――第17号，雄文社，1997年3月

27.「生命の影および生命の輝きとしての言語――後期フィヒテ言語論の奥行き――」 94～110頁
『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――第5号，晃洋書房，1997年11月

28.「判断する自我――フィヒテの定立判断論――」 89～102頁
『法政大学教養部紀要　人文科学編』第104号，1998年2月

29.「自然の可視性――後期フィヒテ自然哲学の本領――」 1～14頁
『一橋論叢』――一橋大学一橋学会編――第119巻2号，日本評論社，1998年2月

30.「風景の現象学的位相――環境教育への一視角――」 26～40頁
『国際教育研究』――東京学芸大学海外子女教育センター編――第18号，雄文社，1998年3月

31.「回互性および相互承認の宗教的位相――地涌と啓示――」 83～101頁
『法政大学教養部紀要　人文科学編』第109号，1999年2月

32.「見ることと言うこと――見ることはみずからの根源が語り出すのを見ることである――」 121～138頁
『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――第7号，晃洋書房，1999年11月

33.「日本におけるフィヒテ自然哲学研究」 1～16頁
『法政大学教養部紀要　人文科学編』第112号，2000年2月

34.「家稷農乗学と郷村建設理論――江渡狄嶺と梁漱溟――」 81～89頁
『比較思想研究』――比較思想学会編――第26号，東京書籍，2000年3月

35.「『自己自身を啓蒙する啓蒙』と感性的・身体的理性――ウルズラ・ライテマイアー『フォイエルバッハと啓蒙』に即して――」 153～162頁
『季報　唯物論研究』第79号，2002年2月

36.「生命倫理と＜身体の場所性＞――生命倫理の人間中心主義を乗りこえるための基礎研究――」 76～80頁
『平成12年度　研究・活動助成報告集』――庭野平和財団編――第10巻 佼成出版社，2002年3月

37.「後期フィヒテにおける了解（Verstand）概念の意義」 10～17頁
『法政哲学会会報』――法政哲学会編――第20号，2002年6月

38.「フォイエルバッハ――人間学の論理――」 228～237頁
『情況』第三期第三巻第7号，情況出版，2002年8月

39. ‘Sehen und Sagen – Das Sehen sieht das Aussagen seines Grundes—’ S. 215～227
In : Fichte-Studien Bd.20, hrsg. von H. Girndt, Amsterdam - New York, NY 2003

40.「マルチカルチュラリズムをめぐる議論に固有な視点を提示する農思想の一断面――安藤昌益と江渡狄嶺――」 72～80頁
平成13年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究C1）研究成果報告書『マルチカルチュラリズムの思想史的・文明論的研究』（課題番号13610047）2004年3月

41.「安藤昌益の非戦論」 82～99頁
長崎総合科学大学長崎平和文化研究所『平和文化研究』第26集，2004年3月

42.「非戦の構想力にむけて――平和アンケートを手がかりに――」 134～148頁

長崎平和研究所『長崎平和研究』No. 19，平和文化，2005年４月

43.「平和教育と構想力――憲法九条が／をささえるもの――」　62～75頁
『唯物論』――東京唯物論研究会編――第79号，2005年12月

44.「像と場のコンテクスト――フィヒテと江渡狄嶺――」　1～8頁
『国際教育研究』――東京学芸大学国際教育センター編――第26号，雄文社，2006年３月

45. ‘Fichte und Tekirei Edo – Bild und Feld –’　S. 233～242
In: Fichte-Studien Bd.30, hrsg. von H. Girndt, Amsterdam - New York, NY 2006

46.「東西自然観の比較がわれわれに語りかけるもの――現代環境論の隠れた主題としての＜身体の自己性＞――」　1～19頁
『国際教育研究』――東京学芸大学国際教育センター編――第27号，雄文社，2007年３月

47.「長崎被爆遺構とその痕跡をめぐる問い――レヴィナスにおける「イリヤ」との連関で――」　65～80頁
長崎総合科学大学長崎平和文化研究所『平和文化研究』第29集，2008年３月

48.「総連関主義（holism）と自律」　191～196頁
平成19年度科学研究費補助金基盤研究Ｂ（課題番号：18320008）研究グループ編『続・生命倫理研究資料集Ⅰ――生命の尊厳をめぐるアメリカ対ヨーロッパの対立状況と対立克服のための方法論的研究――』2008年３月

49.「『善き世界』の具体化と総連関主義」　5～12頁
『ぷらくしす（Praxis）』――広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター編――第９号，2008年３月

50.「ウィリアムズと長崎」　8～15頁
2006～2007年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究報告書『豪州国立図書館「ウィリアムズ・コレクション」の長崎居留地関連資料の発掘調査と分析』（課題番号：18520638）2008年３月

51. ‘Harold Stannet Williams and Nagasaki’　p. 16～24
2006～2007年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究報告書『豪州国立図書館「ウィリアムズ・コレクション」の長崎居留地関連資料の発掘調査と分析』（課題番号：18520638）2008年３月

52.「ヘーゲル『論理学』解釈のために」（討議論文，共同討議者：杉田正樹，木村博）　35～49頁
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第14号，天下堂書店，2008年８月

53.「安藤昌益における無戦論の基底」　211～231頁
『平和をつぐむ思想』――唯物論研究協会編――唯物論研究年誌第13号，2008年９月

54.「アレクサンダー・シーボルトと長崎――哲学的人間学の観点から――」　35～39頁
長崎総合科学大学地域科学研究所『地域論叢』No. 25，2010年３月

55.「＜未来の痕跡＞をめぐる問い――長崎・被爆遺構の思想化へ向けて――」　62～76頁
長崎総合科学大学長崎平和文化研究所『平和文化研究』第30/31集合併号，2010年９月

56. ‘Harold Stannet Williams and Nagasaki: From the viewpoint of philosophical anthropology’　1～10頁
『長崎総合科学大学紀要』第50巻，2010年11月

57.「アレクサンダー・シーボルトの人間像」　53～58頁
長崎総合科学大学地域科学研究所『地域論叢』No. 26，2011年３月

58.「江渡狄嶺と梁漱溟――知解（ちげ）・行解（ぎょうげ）と理智・理性をめぐって――」　1～6頁
長崎総合科学大学地域科学研究所『地域論叢』No. 27，2012年３月

59.「『超越論的論理学』におけるフィヒテの洞見――事実知と三段論法における小前提――」　1～7頁
『長崎総合科学大学紀要』第52巻，2012年８月

60. ‘Das faktische Wissen und der minor im Syllogismus – Fichtes Einsicht in der »transscendentalen Logik«’ S. 79〜89
In: Fichte-Studien Bd.36, hrsg. von J. Stolzenberg, Amsterdam - New York, NY 2012
61.「『超越論的論理学』と『知識学　1812年』をつなぐ「事実的知」の位置価」 25〜38頁
『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――第21号，晃洋書房，2013年11月

学会発表

1．一般研究発表「1804/05年の『イエナ論理学』における‘Erkennen’の意義について」
日本哲学会第46回大会［於　慶應義塾大学］，1987年５月
2．自由課題研究発表「イエナ期ヘーゲルにおける『懐疑主義』について」
日本倫理学会第38回大会［於　北海道大学］，1987年10月
3．一般研究発表「ヘーゲル『論理学』における＜分裂せる媒辞＞と＜否定的推論＞」
日本哲学会第48回大会［於　上智大学］，1989年５月
4．研究発表「江渡狄嶺における＜行＞について」
実存思想協会第５回大会［於　早稲田大学］，1989年６月
5．自由課題研究発表「若きフィヒテにおける言語と自由意志」
日本倫理学会第40回大会［於　京都大学］，1989年10月
6．自由課題報告「若きヘーゲルにおける歴史と懐疑主義」
社会思想史学会第15回大会［於　中央大学］，1990年10月
7．個人研究発表「行と行為――江渡狄嶺とフィヒテ――」
比較思想学会第18回大会［於　大谷大学］，1991年６月
8．一般研究発表「イエナ期フィヒテにおける構想力と言語」
日本哲学会第51回大会［於　甲南女子大学］，1992年５月
9．研究発表「フィヒテとラインホルト――言語論をめぐって――」
日本フィヒテ協会第８回大会［於　広島工業大学］，1992年12月
10. Referat:, Sprache und Gemeinschaft beim Jenaer Fichtè
Seminar unter der Leitung des Hegel-Forschungskreises
［an der Tokyo Universität］, Okt. 1993
11. 研究発表「生命の影および生命の輝きとしての言語
――後期フィヒテ言語論の奥行き――」
日本フィヒテ協会第12回大会［於　東洋大学］，1996年11月
12. 研究発表「見ることと言うこと――『1813年　意識の事実』を中心として――」
日本フィヒテ協会第14回大会［於　上智大学］，1998年11月
13. 個人研究発表「家稷農乗学と郷村建設理論――江渡狄嶺と梁漱溟――」
比較思想学会第26回大会［於　宇奈月国際会館］，1999年６月
14. 個人研究発表「定立判断をめぐるフィヒテとシェリング」
日本シェリング協会第８回大会［於　京都産業大学］，1999年７月
15. Vortrag: Sehen und Sagen［an der Universität Berlin］, Okt. 2000
Der vierte Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft
16. Vortrag: Fichte und Tekirei Edo – Bild und Feld –［an der Universität München］Okt. 2003
Der fünfte Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft
17. Vortrag: Das faktische Wissen und der minor im syllogismus – Fichtes Einsicht in der » transscendentalen Logik « –［an der Martin Luther Universität Halle］Okt. 2006
Der sechste Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft

18. Presentation: ‘Harold Stannet Williams and Nagasaki’［at Australian National University］July 2007
Fifteenth Biennial Conference of Japanese Studies Association of Australia
19. Vortrag: Fichte und Schelling – Um den ersten Grundsatz–［in Brüssel］Okt. 2009
Der siebte Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft
20. Vortrag: Der Stellenwert des faktischen Wissens in der » transscendentalen Logik «［an der Universität Bologna］Sept. 2012
Der achte Kongress der Internationalen J. G. Fichte-Gesellschaft
21. Vortrag: Die Wissenschaftslehre 1812 und das Sehen［an der Fern-Universität Hagen］Okt. 2012
Internationale Fachtagung: Fichtes Wissenschaftslehre 1812
22. シンポジウム提題「『超越論的論理学』と『知識学　1812年』をつなぐ「事実的知」の位置価」
日本フィヒテ協会第28回大会［於　神戸研究学園都市］，2012年11月
23. 提題「農と倫理――梁漱溟と江渡狄嶺からみた東アジアにおける地域協同体の可能性――」
中国社会科学院哲学研究所・日本哲学会，北京外国語大学，2014年９月

翻　訳

1．ヘーゲル『推理論断片』（G.W.F. Hegel: „Zur Lehren von den Schluesen“）［共訳者：石橋とし江・小林俊太・木村博］　1～10頁
『ヘーゲル研究』――上妻精・加藤尚武編――第18号ヘーゲル研究会，1990年12月
2．ヘーゲル『1817年の論理学と形而上学講義』（G.W.F. Hegel: „Vorlesungen ueer Logik und Metaphysik, Heidelberg 1817“）――抄訳――［共訳者：小坂田英之・黒崎剛・藤田俊治・木村博］　108～133頁
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――創刊号，1995年９月
3．ジープ『ドイツ観念論における実践哲学』（L. Siep: „Die praktische Philosophie im deutschen Idealismus）――上妻精監訳――哲書房，1995年11月刊行（共訳）
翻訳担当章：第Ⅲ部・第15「ヘーゲル『法哲学』における国家体制，基本的諸権利および社会福祉」（,Verfassung, Grundrechte und soziales Wohl in Hegels Philosophie des Rechts）　438～474頁
4．ヴェルダー『論理学　ヘーゲル論理学注解および補説』（その１～３）（K. Werder: „Logik. Als Commentar und Ergaenzung zu Hegels Wissenschaft der Logik“［共訳者：大西正人・木村博］
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第４号，1998年８月　59～116頁
同上第５号，1999年８月　53～87頁
同上第６号，天下堂書店，2000年８月　83～114頁
5．ヘーゲル『ハイデルベルク・エンチクロペディー』（1817年）（その１～３）（G.W.F. Hegel: Encyklopaedie der Philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Heidelberg 1817）［共訳者：小坂田英之・黒崎剛・藤田俊治・木村博］
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第６号，天下堂書店，2000年８月　45～71頁
同上７号，天下堂書店，2001年８月　59～105頁
同上８号，天下堂書店，2002年８月　65～112頁
6．ハルトマン『弁証法的方法について――歴史的・批判的研究』（その１～３）
（E.v. Hartmann: Ueber die dialektische Methode. Historisch-kritische Untersuchungen ?［共訳者：柴田隆行・栗原隆・高橋一行・黒崎剛・木村博］
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第７号，天下堂書店，2001年８月　115～143頁

同上 8 号，天下堂書店，2002年 8 月　127～151頁
同上 9 号，天下堂書店，2003年 8 月　111～152頁

7．インタヴュー：ジープ教授にコスモス倫理学の可能性を問う（Ein Interview: Fragen Professor Siep nach der Moeglichkeit der Kosmosethik）　251～266頁
『長崎総合科学大学紀要』第42巻 1／2 合併号，2001年12月

8．ジープ「自己実現，承認，政治的現存――ヘーゲル政治哲学のアクチュアリティ――」
（L. Siep: Selbstverwirklichung, Anerkennung und politische Existenz -- Zur Aktualitaet der politischen Philosophie Hegels – ）［共訳者：忽那敬三，木村博］　2～14頁
『ヘーゲル哲学研究』第 8 号，アクセス21出版，2002年12月

9．ランツェラート「ゲノムのコンテクスト――自然理解および自己理解におよぼすゲノムの影響について――」
（D. Lanzerath: Genom im Kontext – Ueber den Einfluss der Genomforschung auf Natur - und Selbstverstaentnis）　139～155頁
平成15年度科学研究費補助金基盤研究 B1『続・独仏生命倫理研究資料集（上）――独仏を中心としたヨーロッパ生命倫理の全体像の解明とその批判的考察――』（課題番号14310016）2004年 2 月

10．フィヒテ『超越論的論理学・自然哲学』（共訳者：隈元忠敬，松本正男，木村博），
『フィヒテ全集』第18巻，哲書房，2009年11月
（Fichte „Transzendentale Logik / Naturphilosophie“）
『動物の本質解明のための諸命題』　371～381頁
（‘Saetze zur Erlaeuterung des Wesens der Thiere’）
『動物磁気療法にかんする日誌』　383～469頁
（‘Tagebuch ueber den animalischen Magnetismus’）
『動物の本質解明のための諸命題』の訳者解題　474～476頁

11．ファン・デア・メーレ『ヘーゲル――引き裂かれた媒辞』（その 2 ）
（Van Der Meulen: Hegel Die gebrochene Mitte）
［共訳者：柴田隆行・鈴木恒範・竹島尚仁・小島優子・黒崎剛・木村博］
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第16号，天下堂書店，2010年 8 月　83～143頁

書　評

1．『ヘーゲル弁証法と近代認識――哲学への問い』（島崎隆著，未来社）
『ヘーゲル哲学研究』――ヘーゲル研究会編――第 2 号，1996年 7 月　111～112頁

2．W. H. Janke: , „Ich bin - ich: thetisches Urteil oder spekulativer Satz. Fichte oder Hegel ?
（『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――創刊号所収　晃洋書房 1993年11月）〔研究紹介〕
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第 3 号，1997年 8 月　142～145頁

3．G. W. Fichte: „Ueber das Verhaeltniss der Logik zur Philosophie oder transscendentale Logik (1812)“ In: Fichtes Werke IX, Berlin 1971.
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第 4 号，1998年11月　153～156頁

4．„Johann Gottlieb Fichte Werke in zwei Baenden“ Hrsg.v. W. G. Jacobs und P. L. Oesterreich, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1997.
『ヘーゲル論理学研究』――ヘーゲル＜論理学＞研究会編――第 5 号，1999年 8 月　164～169頁

5．『ドイツ観念論における超越論的自我論』（松本正男著，創文社）

『ヘーゲル哲学研究』――ヘーゲル研究会編――第10号，2004年12月　150～153頁

６．『続・長崎にあって哲学する――原爆死から平和責任へ――』（高橋真司著，北樹出版）
長崎平和研究所『長崎平和研究』No. 19，2005年４月　153～159頁

７．『環境保護の思想』（岩佐茂著，旬報社）
『経済』No. 147，2007年12月　142～143頁

８．『ローザ・ルクセンブルク思想案内』（伊藤成彦著，社会評論社）
長崎平和研究所『長崎平和研究』No. 28，2010年３月　141～143頁

９．『感性の精神現象学――ヘーゲルと悲の現象論――』（大橋良介著，創文社）
『実存思想論集』――実存思想協会編――XXV（第二期第17号），理想社，2010年７月　175～179頁

10.『未完のフィヒテ――激動のベルリンを舞台にした一哲学者の「生」のドラマ――』（石崎宏平著，丸善プラネット）
『フィヒテ研究』――日本フィヒテ協会編――第18号，晃洋書房，2010年11月　101～106頁

11.『ヘーゲル　精神の深さ　『精神現象学』における「外化」と「内化」』
『実存思想論集』――実存思想協会編――XXVIII（第二期第20号），理想社，2013年６月　197～200頁

12.『西洋哲学の軌跡――デカルトからネグリまで――』（三崎和志・水野邦彦編，晃洋書房）
『唯物論』（東京唯物論研究会）No. 87，2013年11月　122～124頁

13. 広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター訳『ジープ応用倫理学』
『医療と倫理』――関東医学哲学・倫理学会編――第10号，2016年３月　81～87頁